

人口学的事象による日本人女性の生活段階

—世代と社会経済的屬性によるその変化—

渡 邊 吉 利

I はじめに

結婚や出産、家族の死亡といった人口学的事象による生活の区切りは、個々人の生活に大きな影響を与え強く段階づけて、その生涯のパターン、ライフコースを決定する重要な標識である。

日本における結婚、出産、死亡といった人口学的事象の発生確率と発生のタイミングは今世紀に入ってから現在までに大幅な変化を示し、その変化に基づいた生涯の生活パターン、ライフコースも大きく変わった。この間のライフコースの変化にもっとも大きな影響を与えたものは死亡水準の変化であり、死亡水準の変化によるライフコースの変化の概要についてはすでに検討した¹⁾。しかし、結婚、出産要素の変化による個々人の生涯、生活段階の変化も決して小さいものではない。

本稿では、1890年生まれから1940年生まれまでの日本人女性の結婚、出産のタイミングの変化を、コウホートによる違いとともに夫の学歴水準と農家・非農家といった社会経済的屬性の違いに着目して、その生活段階の特徴を明らかにしようとする。用いたデータは人口問題研究所が過去に実施した各種人口学的調査によるものである²⁾。実際のコウホートの構成は、1885年出生からの有配偶女性を10年間隔で1945年の出生コウホートまで対象にした。また、以下の記述においては、それぞれコウホートは中心の出生年次のもので代表させる、例えば、1885-95年出生の場合はその中心の1890年、1915-25年の場合は1920年をもってコウホートの名称とすることにした³⁾。本稿で問題とする生活段階は、有配偶女性の結婚年齢、第1子の出産年齢、末子の出産年齢とする。さらに生活段階をとらえ

1) 渡邊吉利、「日本人女子コウホートの結婚と出産、死亡によるライフコース」、『人口問題研究』、第181号、1987年1月、pp.1-13。ただし、ここで問題にしているコウホートのライフコースあるいはライフサイクルとは、通常よく示されている（例えば厚生白書などに多用されている）ある年次のデータ（period data）だけに基づくものとは異なり、それぞれの時代に生まれた人々の生涯を追跡・再現するもので生まれた年代ごとに遭遇する時代・社会の影響と到達した年齢段階とを組み合わせた集団の総合的な生活の軌跡そのもの（ただし、ここでの直接的観察の対象は人口学的事象に限定される）である。

2) データは、日本全体についての歴史的動向を明らかにできる、言い換えれば全国を対象にした標本調査でしかも再生産を終了した多くのコウホートを対象にとらえた調査ということで、ここでは1952年実施の「第2次出産力調査」および1985年実施の「家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査」を用いた。調査の性格等の詳細については、それぞれの報告書を参照。厚生省人口問題研究所、『第2次出産力調査』、1953年刊。厚生省人口問題研究所（河野稔果、内野澄子、渡邊吉利、小島宏、坂井博通、三田房美）、『昭和60年度 家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査』、実地調査報告資料、1986年刊。

なお、1900年コウホートと1930年コウホートについてだけだが、女子コウホートの結婚、出産等の人口学的生活段階の概況については、次の論文においても検討しているので、参照されたい。渡邊吉利、「日本人女子コウホートのライフコース——結婚年齢と出産年齢の差異を中心として——」、『人口問題研究』、第183号、1987年7月、pp.23-33。

る指標として、John Tukeyのtri-meanを用いる⁴⁾

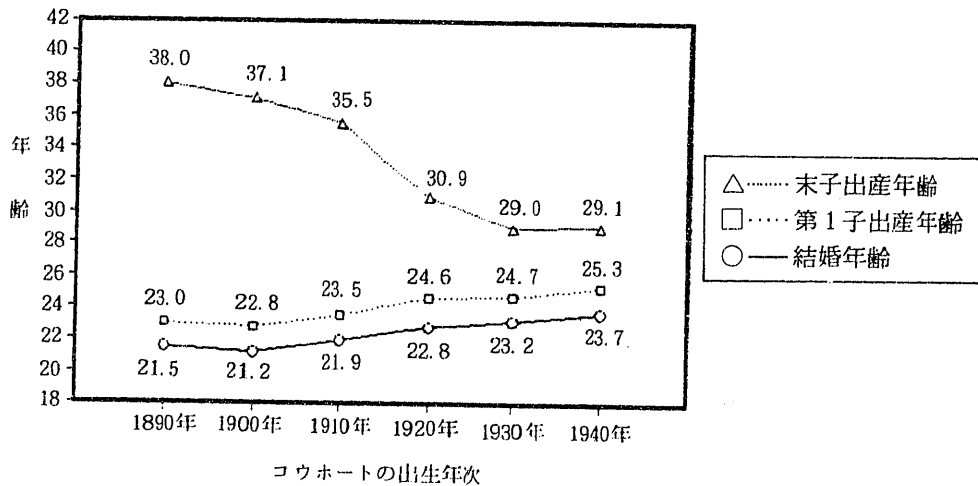
II 結 果

1. 全体の妻コウホートの推移

最初に社会経済的属性の違いを問わない日本人女性全体の結婚、出産のタイミングのコウホートによる変化・推移を確認しておきたい。

ここでの検討対象におけるもっとも古いコウホートである1890年生まれのコウホートは、日本の近代資本主義工業が確立した時期、また世界的には第一次大戦を迎える少し前の時期に結婚適齢期を迎えた世代である。この1890年生まれの女性では、その結婚年齢は21.5歳であり、第1子出産時の年齢は1.5年後の23.0歳、末子の出産時の年齢は第1子の出産後15.0年後の38.0歳、結婚からは16.5年後である。1890年コウホートにおいて、結婚から16~17年かけて出産するその子供数は5人前後である⁵⁾。1890年コウホートの場合、結婚から末子の出産まで16.5年であるからその出生間隔は平均すると3.3年で

図1 結婚、第1子出産、末子出産年齢のコウホート推移：全体



3) 本分析において実際に検討対象にするのは、1890年コウホート (1885~1895年出生)、1900年コウホート (1895~1905年出生)、1910年コウホート (1905~1915年出生)、1920年コウホート (1915~1925年出生)、1930年コウホート (1925~1935年出生)、1940年コウホート (1935~1945年出生) の6つのコウホートである。このうち、前半の1890年、1900年、1910年の3つのコウホートは、「第2次出産力調査 (1952年実施)」の調査時の年齢でそれぞれ57~66歳、47~56歳、37~46歳の妻のデータを用いた。また、後半の1920年、1930年、1940年の3つのコウホートについては、「家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査 (1985年実施)」の調査時の年齢でそれぞれ60~69歳、50~59歳、40~49歳の妻のデータを用いた。

ここで問題なのは、データが必ずしも再生産期間を終了していないことであり、とくに1910年コウホートではこれが問題となるが、実際上かなり前のコウホートにおいても40歳以上の年齢での出産は多くないこと、後で述べるように平均年齢の指標として通常の算術平均ではなく、Tukeyのtri-meanを用いており、統計的にrobustであり分布の末端のデータにあまり左右されないこと、該当するコウホートについて他に適当な調査データが当面では得られないことなどから、注意は必要であるがこれをそのまま用いることにした。

4) ここでのtri-meanとは、結婚・出産の3つの四分位水準時の年齢の一種の加重平均値であり、3つの四分位水準時の年齢をそれぞれ q_1 、 q_2 、 q_3 とすると、 $\text{tri-mean} = (q_1 + 2q_2 + q_3) / 4$ と定義される。tri-meanは、データのサンプル数が小さい場合にも比較的安定した統計量を示してくれる統計的頑健性robustnessのある指標である。John W. Tukey, *Exploratory Data Analysis*, Addison-Wesley, 1977.

表1 コウホート別，社会経済的属性別，妻の結婚年齢，第1子出産年齢，末子出産年齢

コウホート (サンプル)	社会経済的 属 性	出生児数 (人)	事象発生年齢〔tri-mean〕(歳)		
			結 婚	第1子出産	末子出産
1890年 (962)	総 数	4.61	21.5	23.0	38.0
	夫初等学歴	4.76	21.3	22.9	38.1
	夫中等学歴	3.40	23.8	24.7	37.3
	夫高等学歴	3.71	22.0	23.1	36.8
	農 家 非 農 家	5.23 3.76	20.8 22.8	22.5 23.9	38.5 37.3
1900年 (1997)	総 数	4.50	21.2	22.8	37.1
	夫初等学歴	4.72	21.0	22.6	37.8
	夫中等学歴	3.50	21.9	23.3	33.9
	夫高等学歴	3.35	22.3	23.9	33.0
	農 家 非 農 家	5.35 3.76	20.4 22.0	22.0 23.6	38.2 36.1
1910年 (2934)	総 数	4.15	21.9	23.5	35.5
	夫初等学歴	4.32	21.7	23.3	35.9
	夫中等学歴	3.67	22.0	23.7	34.4
	夫高等学歴	3.48	23.2	25.0	34.2
	農 家 非 農 家	4.91 3.71	20.9 22.5	22.5 24.1	36.2 35.1
1920年 (531)	総 数	3.00	22.8	24.6	30.9
	夫初等学歴	3.13	22.7	24.4	31.1
	夫中等学歴	2.87	23.1	25.0	30.7
	夫高等学歴	2.73	22.3	24.6	30.6
	農 家 非 農 家	3.27 2.93	22.5 22.9	24.4 24.6	31.2 30.8
1930年 (1183)	総 数	2.33	23.2	24.7	29.0
	夫初等学歴	2.44	22.9	24.3	28.9
	夫中等学歴	2.28	23.5	25.0	29.3
	夫高等学歴	2.11	23.4	25.0	28.6
	農 家 非 農 家	2.65 2.26	22.4 23.4	23.7 24.9	28.7 29.1
1940年 (1531)	総 数	2.23	23.7	25.3	29.1
	夫初等学歴	2.28	23.2	24.7	28.4
	夫中等学歴	2.18	23.7	25.4	29.2
	夫高等学歴	2.26	24.5	26.0	30.0
	農 家 非 農 家	2.46 2.21	22.6 23.9	23.9 25.5	28.1 29.2

あるが、実際には、結婚から間もない出生順位の早い子供の間隔は短く、後順位になるほどその出生間隔は長くなる。

つぎの1900年コウホートの結婚は21.1歳と前のコウホートとあまり変わらず、第1子の出産年齢もあまり変化がない。このコウホートの前半の1895～1900年出生の人口は結婚適齢期の20歳前後の時が第一次大戦期の経済の高揚・物価の騰貴の時期にあたるが、そうした社会の経済的条件は結婚を前にした若者にとって将来のチャンスをもたらすことが多く結婚の条件としても前のコウホートと同等かむしろ恵まれているとみられるのに対し、後半の1900～1905年出生の人口では大戦中の好景気からの後退による景気悪化のため結婚の条件は少し悪くなっていると思われる。しかし、1895～1905年を通したコウホート全体としては前の1890年前後のコウホートの結婚年齢とあまり変わらないものとなっている。

この1900年コウホートの場合、末子の出産年齢が37.1歳と前のコウホートよりも1年近く速く生み終えていることが注目される。これはこのコウホートの人口再生産活動の初期にあたる1920年代の初めにサンガー夫人の産児制限論の翻訳が雑誌『改造』に掲載されたり、サンガー夫人の来日や石本静枝（加藤シヅエ）、山本宣治、安部磯雄、馬島個等の産児制限啓蒙活動などの一定の高まりがあり、こうした影響が一部の階層に現れたものといえる⁶⁾。1900年コウホートの末子出産年齢の1歳近い低下もこれら産児制限による出生児数低下の影響とみられる。これら産児制限運動の影響が階層のどの部分により大きく現れたかについては、夫の学歴および農家・非農家別階層の検討のところで触れる。結果として、1900年コウホートの結婚から末子出産までの再生産活動は15.9と0.6年の短縮となった。

1910年コウホートの結婚は21.9歳と前のコウホートに比べて0.7年結婚年齢が高くなる。この1910年コウホートの場合、結婚適齢期の20歳前後の時が昭和の大恐慌・不景気の時期と重なっており、就職難や失業といった若者に対する社会の経済的条件の悪化がそれ以前のコウホートに比べて1910年コウホートの結婚年齢の遅れに大きく影響している。

また、1910年コウホートの末子出産年齢は35.5歳と1900年コウホートの37.1歳に比べ1.6年早くなっている。これはコウホートの出生児数が減少したことによるものである。具体的に1910年のコウホートの出生児数をみると、1960年国勢調査の45～49歳および50～54歳層の出生児数の4.2～4.7人がそれに相当するものであり、それ以前のコウホートに比べ0.5～1.0人程度出生力水準が低下している⁷⁾。結婚の遅れと末子出産の早期化のため、1910年コウホートの結婚から末子出産までの再産活動期間は13.6年となり、1900年コウホートよりさらに2.3年短かくなった。

1920年コウホートは日中戦争から太平洋戦争にまたがる時期に結婚適齢期を迎えたコウホートであ

5) 本分析に用いたデータは、上記調査のデータのうち結婚年齢および各順位出生児の出産時の母親年齢が確認できるものに限定した結果、各コウホートとも、限定のないデータの母親の出生児数より僅かながら出生児数の少ない母親に偏っている。1960年国勢調査などによる社会経済的属性を問わない1890年頃のコウホートの出生児数は約5人である。ただし、社会経済的属性別の出生児数のデータは、本分析に用いたデータ以外の国勢調査データなどは必ずしも適切なものが得られなかったため、分析に用いた調査データをそのまま使っている。

6) サンガー夫人の雑誌『改造』への論文掲載は第1回国勢調査の直後の1921（大10）年からであり、翌22年にはサンガーの来日・講演があり、さらにこの1922年には石本静枝（加藤シヅエ）「産児制限の合理的必要性」の『主婦の友』への掲載やサンガーの講演の通訳をした山本宣治による『山岬女史家族制限法批判』や安部磯雄『産児制限論』も刊行された。この1922年、東京に「日本産児調節研究会」が誕生し、翌23年には大阪、神戸にも「産児制限研究会」が生まれている。

7) 国勢調査など各種出生力調査を用いて有配偶女子コウホート出生力水準の長期的推移について観察した渡邊吉利、「完結出生力水準と出生意欲のコウホートの観察——各種出生力調査の妻の出生コウホートによる整理——」、『人口問題研究』、第158号、1981年4月、pp.46-61.を参照。

り、夫となるべき男性の多くが結婚前に兵隊にとられ戦地に赴きあるいは結婚直後に戦地に赴くなどの要因で、結婚年齢および出産年齢、出生児数などに多く特徴がみられる。

この1920年コウホートの結婚年齢は22.8歳と、1910年コウホートに比べ0.9年の大幅な上昇がみられた。これは明らかに、戦争のため相手男性を兵隊にとられたことによる結婚の繰り延べ・遅れの影響である。また第1子出産年齢は24.6歳と1910コウホートより1.1年遅くなった。遅くなった大部分は、結婚年齢の遅れによるものであるが、結婚後から第1子までの出産の間隔が1.7年と比較の対象コウホートの中でもっとも長くなっており、結婚後ただちに夫を戦地に送り、夫婦が引き離されるなど受胎頻度低下の影響による出産間隔延長の可能性もある。

また1920年コウホートは、人口再生産過程の途中で終戦を迎えて戦後の過剰人口に直面し、かなり性急な形で避妊と人工妊娠中絶という出生抑制手段によってそれに対応せざるを得なかった世代である。急遽そうした出生抑制を受け入れた結果、1920年コウホートの出生児数は3.0人となり、前のコウホートに比べ1.5人前後の大幅な子ども数の減少を実現した。その結果、末子のお産年齢は30.9歳と4.6歳もの極端な低下をした。結婚から末子出産までの期間は、8.4年となった。

1930年のコウホートは、終戦前後の動乱期から混乱の収拾にいたる1950年代半ばまでに結婚の時期を迎えた世代であり、出生抑制の考え方はかなり浸透した世代である。このコウホートの出生児数は2.3~2.4人と前のコウホートよりさらに0.7人程度低下した。結婚年齢は23.2歳であり、前のコウホートより0.4年遅くなった。また、第1子のお産は結婚の1.5年後の24.7歳となり、夫を戦場に送った1920年のコウホートより短くなり、以前の間隔に戻ったといえる。

1930年コウホートの末子出産年齢は29.0歳と30歳を割るまで年齢は低下した。また、結婚から末子出産までの再生産活動期間は5.8年となり、前のコウホートよりさらに2.3年短縮した。いわゆる、一括出生 (banching birth) と呼ばれる結婚から末子出産までの期間を極端に短縮した出生パターンは、このコウホートの頃に確立したといえてよい。

1940年のコウホートは、前のコウホートの動向を受けて低出生力は定着して子ども数は2.2~2.3人となり、結婚年齢は23.7歳と0.5年遅くなり、結婚から第1子出産までの間隔は1.6年、末子のお産年齢は29.1歳となった。結婚から末子出産までの期間は5.4年となり、子ども数の減少と結婚年齢の上昇とがあいまった一括出生のパターンはより一層強まっている。

2. 夫の学歴別にみた妻コウホートの推移

社会経済的屬性からみて、以上に述べた推移はどうなるであろうか。コウホートの全体の状況については既に述べたので、ここでは社会経済的屬性間で特徴的な事実にしぼって触れることにしたい。まず、夫の学歴別にみてみたい。一般的には、夫の学歴が高いほど夫の結婚年齢は高くまた妻の結婚年齢も同様に高いといわれる。しかし、具体的にはコウホートにより変化がある。

1890年コウホートをみると、妻の結婚年齢は初等学歴で21.3歳ともっとも低い、ついで低いのは高等学歴の22.0歳であり、もっとも高い結婚年齢は中等学歴の23.8歳である。また、学歴別の出生児数をみると、初等学歴4.8人、高等学歴3.7人に対し、中等学歴で3.4人となっており、結婚年齢とともに出生児数でも中等学歴層で際だって興味深い動向をみせている。結婚から第1子出産までの期間は初等学歴が1.7年、高等学歴が1.1年に対し、中等学歴では0.9年となり、結婚の遅いほど第1子出産までの期間は短くなっている。末子のお産年齢は初等学歴が38.1歳ともっとも遅くまで子どもの出産を継続し、ついで中等学歴が37.3歳であるのに対し、高等学歴が36.8歳と早めに末子のお産を切り上げる。結婚から末子出産までの期間は初等学歴でもっとも長く16.8年、高等学歴で14.8年に対し、中等学歴で13.5年と短い。この中等学歴の結婚から末子出産までの期間が短いのは、1890年コウホートにおける中等学歴の結婚年齢が他の学歴階層より遅いことおよび出生児数が少なく末子のお産の切

図2 結婚, 第1子出産, 末子出産年齢のコウホート推移: 夫・初等学歴

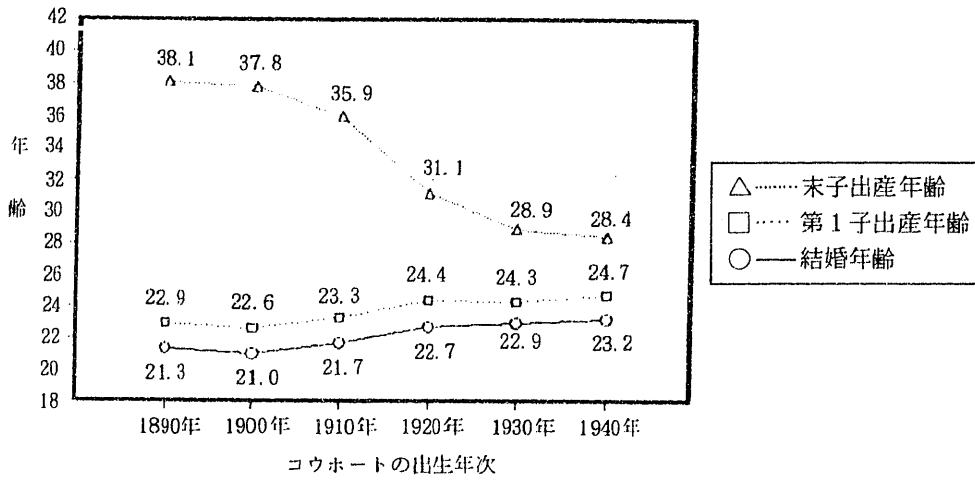


図3 結婚, 第1子出産, 末子出産年齢のコウホート推移: 夫・中等学歴

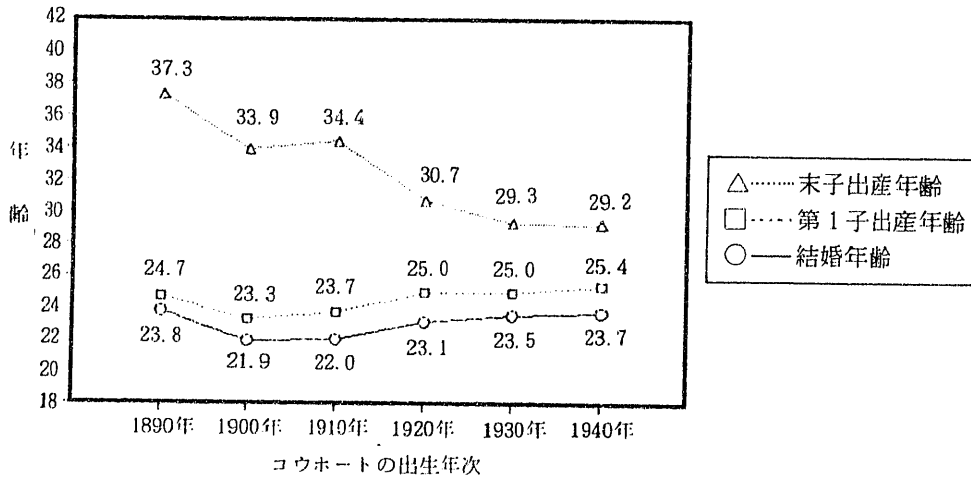
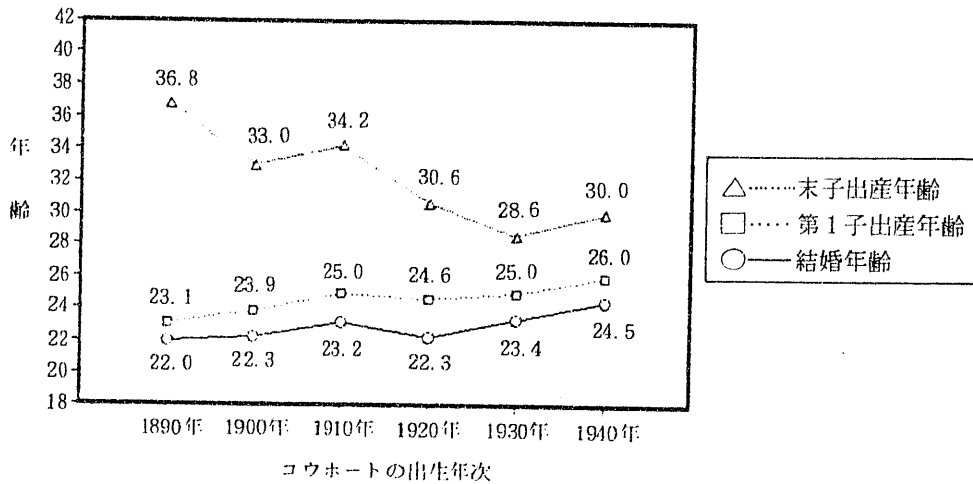


図4 結婚, 第1子出産, 末子出産年齢のコウホート推移: 夫・高等学歴



り上げが比較的早いことによる。

1900年コウホートでは、初等と中等の結婚年齢が低下しそれぞれ21.0歳と21.9歳になったのに対し、高等学歴は22.3歳と若干上昇した。とくに中等の結婚年齢は1890年コウホートに比べ一挙に1.9年早くなったことが注目される。これは日本が参戦することなく戦争景気の果実だけをむさぼった第一次世界大戦の後半頃から大戦後にわたる日本経済の好況とその余波によって、若者の結婚の条件も緩和され、とくに初等、中等学歴層で条件緩和の影響が強く現れたものと思われる。その結果、学歴別の結婚年齢は、通常の常識通りに初等、中等、高等の順に高くなるパターンになった。

1900年コウホートの末子の出産年齢をみると、中等学歴、高等学歴で3.4～3.8年早くなっており、かなり人為的にその後の出生を抑えていること窺わせる。実際、中等および高等学歴の出生児数は、それぞれ3.5人と3.4人であるから初等学歴の4.7人には比べはるかに少ない。ただし、中等学歴の場合、前の1890年コウホートと比べて1900年コウホートの方が出生児数が少なくなったとはいえないが、結婚年齢が前のコウホートより1.9年も早まっているにもかかわらずほぼ同等の出生児数であるところから、中等学歴層の一部においても高等学歴層の一部と同様、追加出生の抑制があったといつて間違いではあるまい。これは、次の2点によって裏付けされるよう。すなわち、①サンガー夫人の来日や、石本静枝、山本宣治らの活躍にみられるように、大正末年から昭和初期にかけて一部の知識階層に避妊・出生抑制の考え方と手段の普及活動がみられた。②1900年コウホートにおける再生産年齢後期に相当する1930年前後は、昭和金融恐慌期と重なる時期であり、生活困難な時代であり、子ども数の制限をも含む生活合理化の要請が一部の階層にはあった。

これらのことから1900年コウホートの比較的学歴階層の高い一部において、出生抑制の考えとその行動の普及がみられ、出生児数と末子の出産年齢の低下にも一定程度影響をもったと結論して誤りではあるまい。

1910年のコウホートは、さきに述べたように、結婚適齢期の時期に1930年代の昭和恐慌に遭遇したため結婚の条件は厳しく、結婚年齢は遅れがちであった。学歴別には初等で前のコウホートより0.7年遅くなった21.7歳になり、中等では22.0歳とほとんど変わらず、高等では0.9歳上昇の23.2歳となった。中等学歴を別にすると、初等、高等ともかなり大幅な結婚年齢の上昇といえるが、とくに高等学歴層の上昇が著しい。

1910年コウホートの末子の出産年齢では中等学歴と高等学歴で前のコウホートより持ち直して0.5～1.2年ほど遅くなっている。これは1910年コウホートの場合、再出産年齢の後期が日中戦争、太平洋戦争期であり国策としての人口増強期であったため、避妊・出生抑制は事実上禁圧され、前のコウホートのような出生抑制は行われなかったとみられる。

1920年のコウホートをみると、非常に興味深いことに、夫が高等学歴の妻の結婚年齢がもっとも低くなっている。すなわち、1920年コウホートの初等では22.7歳、中等学歴では23.1歳と前のコウホートより1～2年も結婚年齢の上昇がみられるのに対し、高等学歴では22.3歳と逆に前のコウホートより1年近く早く結婚するようになっている。このコウホートの結婚適齢期は太平洋戦争期に相当し、夫となるべき男性の多くが戦地に赴いたのであるが、この戦争中の徴兵制度の影響が結婚年齢の変化をもたらしていると思われる。

これは現段階ではまだ仮説に過ぎないが、戦争中の徴兵制度が、もともと結婚年齢の高かった高等学歴層に対しては学窓を巣立つとともに早めに結婚して戦地に赴くなどの低年齢化の方向に働き、他方、相対的に結婚年齢の低かった初等、中等学歴層に対しては徴兵されて一定期間を経てからの結婚などの高年齢化の方向に働いたのではないかと思われる。結果として、1920年コウホートでは学歴間の結婚年齢の差は縮まり、さらに高学歴の結婚年齢の方がわずかながら初等、中等より低いという逆転のパターンになった。

1930年のコウホートでは高等学歴の結婚年齢は中等学歴層と同等まで上昇し、戦争中の異例の結婚パターンはほとんど消滅した。このコウホートは戦後の出生力低下を一番若い年齢において受けとめた世代であり、結婚と第1子の出産年齢は学歴階層により少し異なるにしても、出生児数も末子のお産年齢も驚くほど均質化し、末子のお産年齢は各学歴とも30歳を割り29歳前後となった。

ここでの検討対象におけるもっとも新しい1940年のコウホートでは、結婚年齢は初等23.2歳、中等23.7歳に対し、高等学歴では24.5歳となり他の学歴階層より1年前後遅れて結婚している。一方、末子のお産年齢でも高等学歴と初等、中等学歴との間で1年前後の差があり、出生児数において学歴間の差がほとんどなくなったこととあいまって、結婚から末子お産までの期間の学歴間較差は小さくなり、どの学歴階層においても一括出生パターンは一貫している。

3. 農家・非農家別にみた妻コウホートの推移

農家と非農家の間で妻のこれらの生活段階にどのような違いが認められるであろうか。

1890年コウホートでは、農家の妻の結婚年齢は20.8歳に対し非農家の妻では22.8歳であり、その差は2.0年におよぶ大きなものである。また、末子のお産年齢は、農家38.5歳に対し、非農家では37.3歳であり、農家では早く結婚してより遅くまでお産を続けるパターンである。その結果、出生児数は農家5.2人に対し、非農家3.8人と1.4人の差となっている。

1900年コウホートでは、農家の結婚年齢20.4歳、非農家22.0歳といずれも1890年コウホートより早婚化しているが結婚年齢低下の幅は非農家のほうが若干大きいといえる。これは、第一次大戦時の経済の好況が農家・非農家のいずれにも結婚の条件緩和の効果をもたににしても、都市の非農家層の方がその効果は大きかったことを示すものかも知れない。末子のお産年齢は農家38.2歳に対し、非農家36.1歳であり、前の1890年コウホートに比べ農家が0.3年早く、非農家では1.2年早くなっている。1900年コウホートにおける非農家の末子お産年齢の大幅な低下は、このコウホートの非農家階層の一部で出生抑制観念や手段などの普及による後順位出生の抑制が行われたことを示すものと考えられる。実際、1900年コウホートの出生児数は、農家5.4人に対し、非農家3.8人であり、非農家階層では早婚化の幅は農家階層以上に大きかったにもかかわらず早婚化の帰結としての出生児数の増加はなく1890年コウホートと同じ出生児数にとどまっている。

1910年コウホートでは、農家の妻の結婚年齢20.9歳、非農家の結婚年齢22.5歳と再び結婚年齢は上昇した。これは、すでに何度も触れているように1930年代の経済恐慌の影響を示すものであり、この

図5 結婚，第1子お産，末子お産年齢のコウホート推移：農家

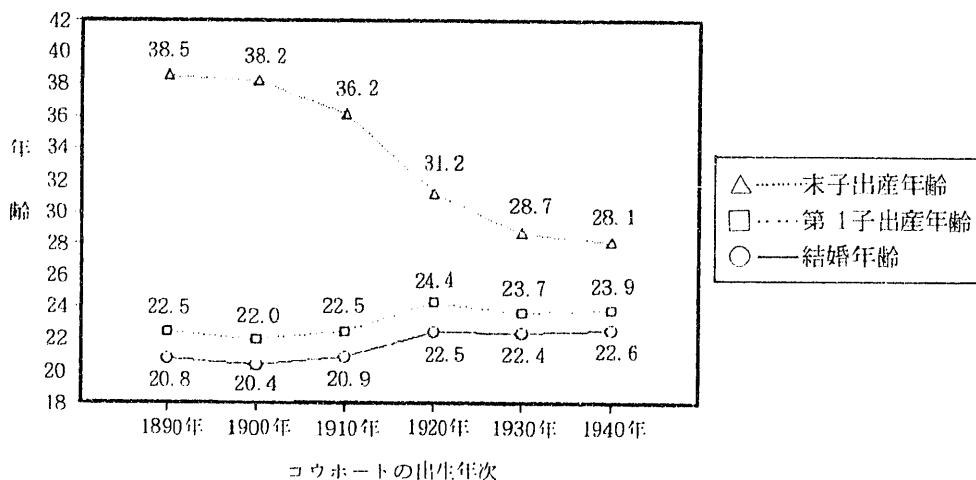
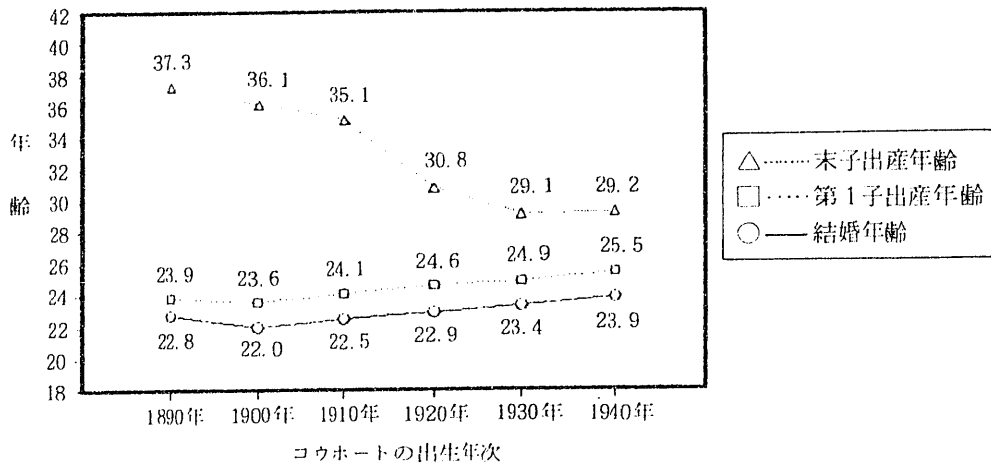


図6 結婚、第1子出産、末子出産年齢のコウホート推移：非農家



不況が農家階層においても結婚の条件をかなり厳しくしたことを示している。

1910年コウホートの末子の出産年齢は、農家において36.2歳に下がり、非農家では35.1歳に低下して、いずれも1900年コウホートより早めに産み終えている。1910年コウホートでは、人口再生産活動のもっとも旺盛な年齢30歳前後の時期が①一方で国策として「生めよ殖やせよ」人口増強策の時期であり産児制限は禁圧されたが、②他方では戦争中であつたため多くの男を兵隊としてとられるなどの状況もあつたため、これは社会的規模で夫婦の受胎頻度・チャンスをむしろ下げる要因となり、政府の意図したほどこれらのコウホートにおいて出生児数の増加があつた訳ではない。また、③このコウホートは30歳代半ばで戦後の産児制限と中絶が可能な時代に突入したため、人口再生産期間の終盤で戦後の受胎調節、人工妊娠中絶による出生力低下を担った年齢のもっとも高い世代といふことができる。

その結果、①の状況から、1910年コウホートにおいて再生産期間前半の年齢では1900年コウホートにおけるようには民間での積極的な産児制限・出生抑制は行われなかつたであろう。しかし同時に、②と③の状況から、1910年コウホートの出生児数は、非農家層では一部に出生抑制の行われた前のコウホートとほぼ同じ3.7人と横ばい、農家階層ではむしろ前のコウホートより出生児数大幅減少の4.9人となっている。また、末子の出産年齢は、農家の妻36.2歳、非農家では35.1歳となった。

1920年コウホートが結婚適齢期に戦争の影響を強く受け、このコウホートにおける学歴間の結婚年齢差が小さくなったことはすでに述べたが、農家・非農家間でも同様である。すなわち、従来、農家の妻の結婚年齢は非農家の妻に比べて2年近く早かつたが、1920年コウホートでは徴兵の影響のために、農家22.5歳に対し非農家22.9歳と結婚年齢差が小さくなった。また、1920年コウホートの人口再生産活動は戦後の時期を主としたため、出生児数は農家3.3人に対し非農家2.9人とそれぞれ前のコウホートより大きく低下し、農・非農間の出生児数格差は小さくなった。その結果、末子の出産年齢は農家31.2歳、非農家30.8歳となり、1910年コウホートより4～5年も早くなり、農・非農間の末子出産年齢の違いも小さくなった。

1930年コウホートでは、農家の結婚年齢22.4歳、非農家23.4歳と1年ほど農家の妻の結婚が早い。1930年コウホートが再生産活動に入るのは1950年前後だが、その前からすでに避妊や人工妊娠中絶の広範囲な利用が可能となつており、その出生児数は農家2.7人、非農家2.3人と前のコウホートよりさらに減少した。1930年コウホートの末子の出産年齢は、農家の妻28.7歳、非農家の妻29.1歳となり、農家階層の方が末子の出産は早く終えるようになった。

1940年コウホートの結婚年齢は、農家22.6歳と前のコウホートとあまり変わらなかったが、非農家では23.9歳と年齢が少し上昇し、農家と非農家の妻の結婚年齢の差は1.3年と少し大きくなっている。1940年コウホートの出生児数は、農家2.5人、非農家2.2人であり、前のコウホートに比べて出生児数は依然減少を続けている。また末子の出産年齢は農家28.1歳と前のコウホートよりさらに少し早まり、非農家では29.2歳で前とほとんど変化がない結果となり、農家の方が末子を早く産み終えるパターンは持続している。

Ⅲ ま と め

1890年から1940年にかけて50年間におよぶ妻コウホートの結婚・出産年齢の変化は、全体としては、結婚年齢が21.5歳から23.7歳へと2.2年上昇し、末子の出産年齢が逆に38.0歳から29.1歳へと8.9年低下して、結婚から末子の出産にいたる人口再生産活動の期間が16.5年から5.4年へと10年以上も短かい $1/3$ の期間になった。これは、その間に出生児数が5人前後から2.2人へと3人近い減少をしたことによる。またこの間の結婚年齢の上昇には、戦争の影響とともに高学歴化と女性の結婚前の雇用労働者化の進行が一定程度影響している。

こうした全体の動向の中で、夫の学歴別および農家・非農家別にみた階層間の特徴として時系列的にいえば、次のように要約できる。すなわち、結婚年齢の階層間格差は夫の学歴でも農・非農間でも、1920年のコウホートで戦争中の徴兵制の影響によりいったん平準化するが、その後は1940年までの各コウホート、階層を通じて時の経過とともに晩婚化が進行している。出生児数は、各コウホートを通じておおむね高学歴層、非農家層で少ないというパターンを持続した。また、初期のコウホートにおいては、夫の学歴では高学歴において農家・非農家別では非農家において結婚年齢が遅く、末子の出産年齢では逆に早いことが多いという常識的パターンがみられたが、後半のコウホートではそうしたパターンも顕著ではなくなっている。すなわち、1930年と1940年のコウホートでは、農家・非農家間の出生児数の差が小さくなったことと結婚年齢が農家において早いそとがあいまって、末子の出産年齢は農家の方が少し早くなっている。また、各コウホートがそれぞれの年齢段階で受けた時代の社会的刻印・痕跡が人口学的生活段階にも大きく反映していることが判明した。時代の社会的刻印との関連で特徴的なことを取り上げれば、1900年コウホートでは、高等・中等学歴階層および非農家階層における出生児数の減少と末子出産年齢の異例な早期化があり、これは昭和恐慌といった経済的条件とサンガー夫人の来日など出生抑制知識の普及の影響と考えられる。

また、1920年のコウホートでは、初等・中等学歴階層および農家階層で結婚年齢の大幅な上昇がみられたのに対し、高等学歴階層と非農家階層では結婚年齢はわずかだけ上昇するかまたはむしろ結婚年齢の低下がみられたことであり、戦争による徴兵の影響が階層間に異なる効果をもたらし、結果としてこのコウホートでは結婚年齢の階層間平準化が進んだことを示している。

さらに、再生産期間が戦後に及んだコウホートでは各階層とも、避妊や中絶の自由化の影響をこうむって出生児数や末子の出産年齢の大きな変化をとげている。その変化の程度は、かつての水準が著しかっただけに、初等学歴層や農家階層においてより大きいものであった。

さいごに、以上に述べたことを含めて今回の分析の成果は、女性の結婚、出産という社会的な現象・事件からはもっとも迂遠な事象ともみえる現象について、コウホートの事象発生のタイミングと時代との関連を観察することによって、それぞれのコウホートが第一次大戦や昭和恐慌、戦争中の徴兵制度、戦争中の人口増強策、戦後の避妊・中絶の自由化といった社会の動きの影響を強くこうむり、その階層・立場に即して対応しながら生活段階の区切りとなる人口学的事象を実現していることの一部を明らかにしたことである。